

Title	ルソーにおける菜食の思想と自然意識
Author(s)	田中, 恒寿
Citation	仏文研究 (1993), 24: 61-78
Issue Date	1993-09-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/137803
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ルソーにおける菜食の思想と自然意識

田 中 恒 寿

はじめに

ジャン＝ジャック・ルソーは、分量こそ多くはないが、著作のあちこちで菜食に関する記述を行っている。特にそれが比較的まとまった形で現れるのは、『人間不平等起源論』、『新エロイズ』、『エミール』においてであり、そこでなされる菜食についての議論に注目しながら、その背後にある思想や自然意識を探っていくことが小論の目的である。

いわゆる菜食主義の歴史は古く、西洋では、古代ギリシアのピタゴラスをして“菜食主義の父”とする見方が一般的である。この場合菜食主義者とは、経済や生存環境といったやむにやまれぬ理由から動物性の食品を口にすることが出来ない人のことではなく、割合に食べ物が豊富にあって、肉食が可能であるにもかかわらず、敢えて自らの意志によって肉食を避ける人のことを指している。菜食主義者になる理由としては、単に動物を殺すのがかわいそうだというナイーブなものから、宗教上の戒律によるもの、あるいは美容や健康のため、といったものまで様々である。このような人間の自発的な菜食は、時代や地域を問わず、かなり普遍的に見られる現象であると言えるが、ヨーロッパにおいて、とりわけ菜食主義が盛んになるのは、18、19世紀を中心とした時代である。ニュートン、ヴォルテール、フランクリン、シェリー、エマーソン、ソロー、オールcott、トルストイ等々といった、壮々たる菜食主義者の系譜の中に、ルソーの名前も挙げられる。

しかし、ルソー自身の食生活は、次の『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く、対話』からの例で見るかぎり、質素・簡略を旨とはしていても、とりたてて菜食主義者を標榜しなければならないほどのものではなかったようだ。

Ses goûts sont sains, délicats même mais non pas raffinés. Le bon vin, les bons mets lui plaisent fort, mais il aime par préférence ceux qui sont simples, communs, sans apprêt, mais choisis dans leur espèce, et ne fait aucun cas en aucune chose du prix que

donne uniquement la rareté. Il hait les mets fins et la chère trop recherchée. Il entre bien rarement chez lui du gibier, et il n'y en entrerait jamais s'il y était mieux le maître. Ses repas, ses festins sont d'un plat unique et toujours le même jusqu'à ce qu'il soit achevé¹⁾.

それはむしろ、菜食・肉食といった区分とは別の指標、すなわち、美食か否か、贅沢を好むか否か、といった指標によって分類されるべきものであろう。ルソーは食べ物に関して、金のかかる贅沢は好まなかったが、かといって美食の精神まで放棄することはなかった。いたずらに料理に凝るのではなく、その土地その土地のありふれた産物の中から素材本来の味わいを引き出すべし、という主張は、『エミール』や『新エロイズ』においてもしばしば繰り返される。

ところがこのルソーも、実生活とは別に、作品の中では、食に関して、また少々異なった考えを展開している。そこでは、明らかに肉食を排し、菜食を勧める主張が見出せるのだ。だが、このような矛盾を非難するには当たらないだろう。後で詳しく見ていくように、菜食をきわめて実践的な問題として云々するのではなく、人間の本来の食のあり方がいかなるものであったか、というところで菜食・肉食を論じる——当然、そこから、あるべき食の姿として、菜食なり肉食なりが、日常的な実践のレベルにおいて、理想ないしは規範としての性格を持つこともあり得ようが、それでも絶対的な拘束力を持つものではない——ことが、18世紀においてはしばしば見られた。そこで、菜食を日々実践する菜食主義者と区別するため、以下小論においては、ルソーのように、現実の食生活はいざ知らず、少なくとも主義主張として、「人間は本来菜食であった、ゆえに菜食は人間にとって自然である」と考える人、またその結果、菜食を奨励する人を指して、菜食擁護論者と呼ぶことにする。同時にその対極には、肉食擁護論者とでも名付けるべき人たちがいる。いうまでもなくヨーロッパの文明は肉食によって支えられたものであり、理由はどうあれ肉食を容認する人が、絶対多数を占めるのは当然である。ここで敢えて肉食擁護論者と言ったのは、菜食擁護論の高まりに対抗して肉食の正当性を論じた人々、例えば、ホッブス、E・ダーウィン等を指すためだ。菜食擁護論には、多かれ少なかれ、食生活の現状に対する批判の意図が含まれる。したがって、人間本来の菜食を証明しようと持ち出された個々の証拠が、現代の私たちの目から見ていかにナンセンスな物であるかを、いちいちあげつらったところであまり意味はないだろう。重要なのは、食というものに対する考え方や認識であり、ひいては、それを深いところで支える人間存在の把握の仕方や自然意識である。

ヨーロッパの18世紀から19世紀は、食に関する考察が、人間のあり方に関するそれと結び付いて活発に行われた時代だった。フランスでも、それまで王公貴族の特権だった美食の習慣が、19世紀の後半になると急速に大衆化され、政治の分野のみならず、味覚の分野においても革命的な状況を呈してくる。また、産業革命や都市化に伴う経済的条件の変化が、人々の食卓にも変化をもたらした。あらためて食のあり方について問い直そうという機運を生んだということも否めない。

ブリヤ＝サヴァラン『美味礼讃』は、そのような機運がフランスのモラリストの伝統と結び付いた最良の成果であると言える。

このような食習慣の大きな変化と相前後して、人間が本来菜食であったかどうかという議論が盛んに行われるようになったということは、軽視すべきではない。自然状態にまで遡って人間社会の本来在るべき姿を模索するという動きが、現実の社会制度を相対化する視点をもたらし、ひいては、その不合理や矛盾をラディカルに変革しようとする意志と連動していたように、人間がもともと菜食であったか肉食であったかという議論が高まった背景には、現実の食生活がすでに自明のもでなくなったという実感や、いやおうなしに巻き込まれてしまう——人は食べないわけにはいかないから——食習慣の変化に適応するために取るべきスタンスの模索、また、それに伴う漠とした緊張や不安など、さまざまな要素が入り交じっていたと考えられる。食べ物は、人間にとって、自分の身体を除けば、最も身近な自然であるという見方もできよう。このような食についての根本的な問い直しは、栄養学や経済学といった個々の分野にのみ還元できる問題ではない。そこには自ずから、人間についての問いや、自然—人間関係についての問いも含まれてくる。続いて、実際にルソーの菜食擁護論を見ていくことにしよう。

1. 性善説と菜食擁護論

ルソーの菜食擁護論が端的に展開されるのは、その第二論文『人間不平等起源論』（1754年執筆）においてである。ここでルソーは、繰り返し、人間が本来（自然状態において）菜食であったと主張するが、このような議論のし方は、起源にまで遡って人間存在や社会制度のあり方ないしは、あるべき姿を検討しようとする、あの18世紀に特徴的な発想パターンと軌を一にする。その際ルソーは、菜食を黄金時代や楽園のイメージと結び付ける古典文学やキリスト教の伝統を利用しながら——後述するように、これは当時にあっては常套的な議論である——、加えて、実証的な、ないしはそう見なし得る根拠も出来るかぎり援用しながら、人間がもともと菜食であることを理由に、自然状態が平和で幸福な状態であることを示そうとした。ルソーが菜食を擁護するのは、ホッブスが描くところの自然状態——万人の万人に対する戦争状態——を覆すために採用した、ひとつの戦略であると言うこともできよう。ルソー自身明言している通り、彼の言う自然状態とは、過去にも現在にも未来にも存在しない架空の状態であるが、それにもかかわらず、自然人は、あるときは原始人、またあるときは未開人、さらには子供、といったモデルを借りながら、現実の生命を吹き込まれていく。そして、食のあり方を軸にして、ルソーは独自の自然人の像を形づくっていくのである。

しばらくはルソーの論議を追ってみることにしよう。まず第一章の始めで、幸福な自然人の姿

が描かれ、食べ物としての植物（樅の実）が登場する。

Je le[homme naturel] vois se rassasiant sous un chêne, se désaltérant au premier ruisseau, trouvant son lit au pied du même arbre qui lui a fourni son repas, et voilà ses besoins satisfaits²⁾.

自然人の御馳走は木の実であり、それを腹一杯食べて充足感に浸る。このようなイメージは、まったくルソーの独創というわけではなく、古くからの文学的伝統に負うところも大きい。たえとえばオウィディウスは黄金時代に関して次のように述べている。「大地そのものも、ひとに仕える義務はなく、鋤で汚されたり、鋤の歯で傷つけられたりすることなしに、おのずから、必要なすべてを与えていた。ひとびとは、ひとりでにできる食べ物に満足して、やまももや、野山のいちごや、やまぐみや、棘々の灌木にまつわりつきいちごや、さらには、生いひろがった樅の木から落ちたどんぐりを集めていたのだ。³⁾」ところが、ずっと時代を下って、17世紀のブーフェンドルフになると、これとほとんど似たような状態を描きながら、それをかなり悲惨なものとして捉えている。

Il faut nécessairement se le représenter tout nu; incapable d'autre langage que celui qui consiste dans des sons inarticulés; sans éducation et sans aucune culture de ses talents naturels; effrayé de la moindre chose, et rempli d'étonnement à la vue même du soleil; goûtant, pour apaiser sa faim, de tout ce qui se présente devant lui; se désaltérant de la première eau qu'il trouve; et cherchant à se garantir, comme il peut, des injures de l'air, dans une caverne ou dans le fond d'une épaisse forêt⁴⁾.

ところがルソーは、このようなブーフェンドルフ描くところの自然状態を逆手にとって、木の実や小川の水での食事が人間にとって幸福なものであるというアンチテーゼを突き付けた。それはいかなる根拠にもとづいているのだろうか。しばらくルソーの言うことに耳を傾けてみよう。

La terre abandonnée à sa fertilité naturelle, et couverte de forêts immenses que la cognée ne mutile jamais, offre à chaque pas des magasins et des retraites aux animaux de toute espèce. Les hommes dispersés parmi eux, observent, imitent leur industrie, et s'élèvent ainsi jusqu'à l'instinct des bêtes[...]⁵⁾.

ここで、ルソーはそれまでの森というものが持っていた中世的なイメージから完全に抜け出して

しまったと言って良いだろう。森はもはや、人間社会の外部にあって魑魅魍魎が支配している恐ろしい空間ではなくなり、その中でいわゆる未開人のように暮らすことも、さして悲惨なことではなくなった。自然はあるがままにして肥沃であり——農耕をおこなわずとも食べ物はふんだんに手に入る——、同時に安息を保証してくれる——猛獣に襲われても容易に逃げることができる——隠れ家でもある。注目すべきは、森が食料倉庫（《magazins》）のようなものとして想定されていることであろう。森を文明の外部にある魔性の棲み家から人間にとって快適な、一種の樂園へと変貌させるその転換点において、またブーフンドルフの解釈を逆転させるために、食べ物が重要な役割を果たすかのようだ。この部分にルソー自身がつけた注によると、ルソーは、同じ広さ、同じ質の土地に、粟と小麦を植え、その収穫量比較するという実験までして、「木々の果物は他の植物が行いうるよりもさらに豊かな養分を、動物に提供する⁹⁾」という結論を得ている。原始の森が、農耕を行わない自然人にも平和な暮らしを可能にするだけの食料を提供してくれるというのだ。森が果物で満たされた食料倉庫であるというところに、自然状態を肯定するルソーの思想の基本的な支えがあると言えるが、それだけではまだ十分ではないだろう。

続いて、このような樂園とのアナロジーによる森のイメージに、人間本来の食生活のあり方に関する議論が絡んでくる。豊かな森の中で暮らす人間は、「他の動物たちが分かち合っているさまざまな食物の大部分を、差別なしに食物とする⁷⁾。」すなわち、ここでルソーは、ひとまず人間の雑食性を認めているように見えるが、そこに付した自注の中では、即座に、人間が本来は草食動物のカテゴリーに入れられてしかるべきものであることを証明している。

Il semble donc que l'homme, ayant les dents et les intestins comme les ont les animaux frugivores, devrait naturellement être rangé dans cette classe, et non seulement les observations anatomiques confirment cette opinion : mais les monuments de l'antiquité y sont encore très favorables. 《Dicéarque》, dit St. Jérôme 《rapporte dans ses livres des antiquités grecques, que sous le règne de Saturne, où la terre était encore fertile par elle-même, nul homme ne mangeait de chair, mais que tous vivaient des fruits et des légumes qui croissaient naturellement.》 (Lib. 2. Adv. Jovinian)⁹⁾

ルソーが証拠として持ち出してきたのは、第一には、解剖学的見地からみた歯の形と腸の構造であり⁹⁾、第二には、歴史家（ディカイアルコス）の証言であり、さらには、自注の形で、その歴史的記述を裏付けるために、近代の旅行者が報告したバハマ諸島の住民——肉を食べて死んでしまった——の例が挙げられてさえている¹⁰⁾。なんとしても人間を草食動物の仲間に入れようとするルソーのこだわりは、『人間不平等起源論』137ページ（プレイヤッド版）に付した自注からもうかがえる。肉食動物と草食動物の子供の数と乳房の数を比較した後で、ルソーはこう締め括ってい

る。

il me suffit d'avoir montré dans cette partie le système le plus général de la nature, système qui fournit une nouvelle raison de tirer l'homme de la classe des animaux carnaciers et de le ranger parmi les espèces frugivores¹¹⁾.

そして、ルソーが、自説——人間は本来菜食であるという説——を補強するのに最も有利なものとしている根拠は、次に見る、「餌食は肉食動物の間の闘争のほとんど唯一の原因となるものであって、果実を食べる動物はお互いの間で、たえず平和に暮らしている」という点に関わるものである。

On peut voir par là que je néglige bien des avantages que je pourrais faire valoir. Car la proie étant presque l'unique sujet de combat entre les animaux carnaciers, et les frugivores vivant entre eux dans une paix continuelle, si l'espèce humaine était de ce dernier genre, il est clair qu'elle aurait eu beaucoup plus de facilité à subsister dans l'état de nature, beaucoup moins de besoin et d'occasions d'en sortir¹²⁾.

この点が真であるということになれば、あとはルソーの論旨通りに、「もしも人類がこの後者の種類に属しているのならば、人類にとって自然状態のなかで生存しているほうがはるかに容易であり、自然状態から出る必要も機会もはるかに少なかっただろうということは明らか」だということになるのである。したがって、「有利な点を利用できるにもかかわらず、それを無視していることがわかるだろう」という言い方からも推測できるように、肉食動物は闘争を好み草食動物は平和を好む、という考え方は、当時、少なくともルソーの想定していた読者層にあっては、馴染みの深いものであった。例えばビュフォンは、『博物誌』第四巻（1753年）の「馬」の項で、草食であるがゆえに馬は争うことをせず平和に暮らし、餌食は肉食動物の間の争いの一般的な原因であると述べている。

Comme l'herbe et les végétaux suffisent à leur nourriture, [...] et qu'ils [les chevaux] n'ont aucun goût pour la chair des animaux, ils ne leur font pas la guerre, ils ne se la font point entre eux, ils ne disputent pas leur subsistance, ils n'ont jamais occasion de ravir une proie ou de s'arracher un bien, sources ordinaires de querelles et de combats parmi les autres animaux carnaciers; ils vivent donc en paix¹³⁾.

またさらには、同じく「牛」の項で、ビュフォンは「l'homme pourrait, comme l'animal [le

bœuf], vivre de végétaux¹⁴⁾》とも言っている。このビュフォンの代表作を、ルソーはたびたび『人間不平等起源論』のなかで引用しており、今問題になっている部分をものした時も、「馬」の項目を念頭においていたであろうことは、十分に考えられる。こうして、ルソーはまず、森が木の実や果物をふんだんに手に入れることのできる食料倉庫のようなものであって、自然人が生きていくための条件を満たしていることを示した後で、人間がもともと菜食であったことを証明し、なおかつその際に、菜食が平和を好む穏やかな性格の証しであるという議論を援用することによって、自然状態における人間の幸福を示すに至ったのである。

ところで、菜食と幸福とを結び付けるために、ルソーはことさらビュフォンにこだわる必要はなかった。K・トマスによると、人間がもともと菜食実践者だという考えは、古来からの伝統であり、18世紀当時の教養層には広く流布していたということである¹⁵⁾。ギリシア・ローマの文献には、菜食主義への言及が多く見られ、黄金時代の人間は菜食をしていたと信じられていたらしい。オウィディウスの例はすでに見た通りである。また、ピタゴラスの肉食に対する道義的な非難も、オウィディウスやプルタルコスによって、広く人口に膾炙していた。プルタルコスに関しては、ルソーはまさに『エミール』の中で、ピタゴラスの肉食に対する道義的な非難について、それに賛同する立場から、3ページにわたってプルタルコスを引用している。少し長くなるがルソーが引くところのプルタルコス（『倫理論集』「肉食の楽しみについて」）をかいつまんで孫引きしてみよう。

《Tu me demandes, disait Plutarque, pourquoi Pythagore s'abstenait de manger de la chair des bêtes; mais moi je te demande, au contraire, quel courage d'homme eut le premier qui approcha de sa bouche une chair meurtrie, qui brisa de sa dent les os d'une bête expirante, qui fit servir devant lui des corps morts, des cadavres, et engloutit dans son estomac des membres qui le moment d'auparavant bêlaient, mugissaient, marchaient et voyaient? [...] Comment put-il voir saigner, écorcher, démembrer un pauvre animal sans défense? Comment put-il supporter l'aspect des chairs pantelantes? [...] Mais vous, cent fois plus féroce qu'elles [bêtes féroces], vous combattez l'instinct sans nécessité pour vous livrer à vos cruelles délices; [...] mange cet agneau tout vif, dévore ses chairs toutes chaudes, bois son âme avec son sang. Tu frémis, tu n'oses sentir palpiter sous ta dent une chair vivante? Homme pitoyable! [...] Ce n'est pas assez, la chair morte te répugne encore, tes entrailles ne peuvent la supporter, il faut la transformer par le feu, la bouillir, la rôtir, l'assaisonner de drogues qui la déguisent; il te faut des charcutiers, des cuisiniers, des rôtisseurs, des gens pour t'ôter l'horreur du meurtre et t'habiller des corps morts, afin que le sens du goût trompé par ces déguisements ne rejette point ce qui lui est

étrange et savoure avec plaisir des cadavres dont l'œil même eut peine à souffrir l'aspect.》¹⁶⁾

ここでプルタルコスには、凄惨で吐き気を催さんばかりの血なまぐさを強調しながら、肉食を道義的に非難すると共に、動物の肉を食べるくせに動物を殺す残酷さに耐えられない人々の小心さにも攻撃を加えている¹⁷⁾。

ちなみに、いわゆる菜食主義者を表す英語の《vegetarian》という言葉ができたのは19世紀半ばのことであり、これがやがてフランス語にも輸入された。これはイギリスに起源を持つ菜食主義運動——理論と実践を含む——が社会的な現象として無視できない高まりを見せたことの証であろう¹⁸⁾。18世紀フランスでは、もっぱら医学用語としての菜食療法(régime végétal)もしくは、ピタゴラス療法(régime pythagoricien)という語が用いられていた¹⁹⁾。ピタゴラスの倫理的・道徳的な肉食拒否の思想は、「健康」(医学)という衣をまとして近代に蘇るのである。

また、キリスト教の伝統の中では、人間の肉食が始まったのはノアの洪水後のことに過ぎず、楽園追放直後の混乱期にあっても、人間は菜食であった。したがって肉食こそ人間の墮落の象徴であるということは、誰しもが認めるところだったようだ。それゆえ、肉食の自発的禁止こそ、精神の肉体への勝利の象徴である、というのが、セネカ、並びに、中世キリスト教徒たちに共通した主張でもあった。「墮落」後、肉食を取り入れたからこそ、人間は共に戦い、いがみあうことになったのだから、肝要なのは、あらゆる獰猛さ、激怒、暴力の発現を未然に阻止することであり、菜食主義は、このような攻撃心を克服するための手段であったと言える²⁰⁾。

このように見てくると、自然状態における人間の性善をうったえ、ホッブズ流の戦争状態を、社会状態に起因するものだとするルソーが、なぜあれほど人間本来の菜食にこだわったのかが分かってくるだろう。自然状態における人間の幸福や善良さを主張するルソーにとって、菜食が喚起する、性格の穏やかさや善良さ、平和な楽園や黄金時代といったイメージと、かたや肉食から連想される、残忍な性格や人間性の墮落といったイメージとは、自説を補強するのに格好の材料であり、これを利用しない手はない。しかし、あまりに神話的な常識にばかり頼っているわけにもいかなだろうから、解剖学や歴史家の説、旅行記などの拠って実証的な根拠をかだめることも必要だろう。こうして菜食擁護論は、ルソーの性善説を支えるひとつの要石となるのである。

また、自然意識という面から見ると、ひとつには、原始の森に放り出されたばかりの自然人は、他のあらゆる動物と同じく本能のみにたがって生きる、とか、分類学上も人間は草食動物の仲間である、といったように、菜食擁護論者ルソーにとっては、人間と動物の区別や、人間をすべての動物よりも優れたものとして位置つける序列意識が、曖昧になってきているということが言える。動物の屠殺を残酷だと感じたり、殺される動物を哀れんだりするのは、人間の倫理や道徳を広く動物にまで妥当させようとする態度の現れであろう。このような態度の変化には、ひとつに

は、肉（家畜）の生産の場と消費の場の分離が、都市の発達にともなって押し進められていくにしたいが、都会では家畜との直接的な接触を持つ機会が少なくなり、屠殺が残酷で、動物たちがかわいそうだとする感傷的な態度が養われてきたということと同時に、もうひとつには、楽しみのために飼育される動物、すなわちペットの存在が直接・間接に関わっていると考えられる。ペット飼育は中世富裕階級の間ですでに流行していたが、中産階級の間で、とりわけ町の中でごく普通に飼われるまでになったのは、16、17世紀のことらしい。こうした自然との「感情的な」関係は、動物だけにとどまらず、植物においても同様で、美しいからという理由で装飾的な園芸植物が盛んに栽培されるようになる。確かにルソーは、人々の園芸熱を批判する。しかしそれは、単に珍奇な植物を有り難がる姿勢や、植物園での人工的な栽培を厭わしく感じただけで、野の花を美的に観賞する態度を否定しているわけではない。実用目的のために行う植物研究、すなわち薬草学を、ルソーが繰り返し非難するのも、美の対象として自然を眺める非実用的ないしは非功利主義的態度のあらわれに他ならない。

2. 「エミール」における子供の食べ物の問題

「エミール」においては、子供にいかなる食べ物や料理が適しているかという観点から、さまざまな議論がなされているが、そこに一貫している主張は、自然な好み（*goût*：味覚）に従え、ということである。「単純な料理」が繰り返し強調されるのも、この第一原理から演繹されるの事であり、そこから「凝った料理」に対する批判も生まれてくる。興味深いのは、この主旋律に付かず離れず、副旋律としての菜食のテーマがハーモニーを奏でているということだ。

イギリスの哲学者ジョン・ロックは、その『教育に関する考察』（1693年）の中で、子供の食事に関して、肉類はできるだけ控えるべきであり、牛乳、ポタージュ、かゆ等の食品が子供には適している、といったことを述べている²¹⁾。ロックによれば、このような「あっさりした、簡略な」食べ物こそが「自然の要求」するものなのである。ロックの場合とりもなおさず、食習慣と健康との関わりから論じているのであるが、結果的には肉食を避け、菜食を勧めるという形になっている。近代において、もともと菜食が医学（食餌療法）として受け入れられたこととも関連するが、菜食に関するディスクールと健康にいい食べ物に関するディスクールとが、互いに矛盾しないということは示唆的であろう。「健康」とは、文明化の行き過ぎを矯正しようとする傾向を持った思想や感情のシンボリック概念であり、「健康」であることによって自然は肯定される。菜食と「健康」とが両立するということは、菜食擁護論が文明批判となり得ることの証しでもある。自然人が菜食でなければならない理由は、この点からもうなづけよう。ルソーの——むしろ、あらゆる、と言うべきか——菜食擁護の理論は、根底において自然との調和という理念に依拠していると

える。

ともあれルソーは、このようなロックの主張を無理なく受け入れることが出来たのであろう。その強い反響を、私たちは、『エミール』の中に再び見出すことができる。しかし、ルソーの教育論は彼の自然人の思想と分かち難く結び付いているところに特色がある。そこに描かれる子供には、影なり日向になって、自然人の面影がつきまとう。ロックにおいてはあまり強調されていないが、ルソーにおいてははっきり、子供に適した食べ物とは、子供にとって自然な、すなわち自然の好みにしたがった食べ物であり、裏を返せば、自然人の食べ物ということになる。また、私たちの文脈に即して言えば、人間が本来（自然状態において）食べるべき物なのである。『エミール』の第二編後半に、食事の問題が集中的に論じられている箇所がある。まず、次の引用を見よう。

Il n'y a point naturellement pour l'homme de médecin plus sûr que son propre appétit, et à le prendre dans son état primitif, je ne doute point qu'alors les aliments qu'il trouvait les plus agréables ne lui fussent aussi les plus sains. [...] Il suit de là que les goûts les plus naturels doivent être aussi les plus simples. [...] Ceci me paraît vrai dans tous les sens et bien plus appliqué au goût proprement dit. Notre premier aliment est le lait, nous ne nous accoutumons que par degrés aux saveurs fortes, d'abord elles nous répugnent. Des fruits, des légumes, des herbes, et enfin quelques viandes grillées sans assaisonnement et sans sel firent les festins des premiers hommes²²⁾.

〈enfin〉とは、単なる列挙のしめくくりを示すものではなく、時間的な前後関係を表しているとするのが妥当であろう。果物、野菜、（香）草と、順に慣れていった後、「最後に」肉食にたどりつく——文明への足がかりを得る——のである。この少し後でも同様に、子供の食べ物に関する好みを根拠として、菜食は人間にとって自然なことであるという主張がなされる。

Un des preuves que le goût de la viande n'est pas naturel à l'homme est l'indifférence que les enfants ont pour ce mets-là et la préférence qu'ils donnent tous à des nourritures végétales, telles que le laitage, la pâtisserie, les fruits, etc²³⁾.

こうして子供の好む食べ物という観点からも、人間は本来菜食であり、肉食の習慣は後になって獲得されたものであるとするルソーの説が補強される。この直前には、単純な料理の観点から、同様の主張がなされている。

Cela ne contredit point les maximes que j'avançais tout à l'heure sur la simplicité des mets. [...] Leur[enfants] appétit continuel qu'excite le besoin de croître est un assaisonnement sûr qui leur tient lieu de beaucoup d'autres. Des fruits, du laitage, quelque pièce de four un peu délicate que le pain ordinaire; surtout l'art de dispenser sobrement tout cela, voilà de quoi mener des armées d'enfants au bout du monde, sans leur donner du goût pour les saveurs vives, ni risquer de leur blaser le palais²⁴⁾.

ところで、これら二つの引用に共通して、乳や乳製品への言及がなされているが、フランス語では菜食主義を表すのに、〈végétarisme〉と〈végétalisme〉の二通りの単語があって、前者においては、あらゆる動物性の食物を排除する厳格な後者の場合と異なり、ミルクや乳製品、卵、蜂蜜等、動物起源の食べ物いくつかは許容されている。〈végétarisme〉においてなぜこれらの食品が許されるのか、ここでは、その場でもないのに詮索は控えるが、ルソーのミルク、並びに乳製品に対する並々ならぬこだわりは、特筆に値する。「植物性の食べ物」は、子供に適しているのみならず、乳幼児の段階でその糧となる乳を提供する乳母にとっても好ましいものである。なぜなら乳母の食べ物によって、その乳の質が変わってくるからである。よい乳母の条件に関して、ルソーが『エミール』の中で詳説している部分をかいつまんで見てみよう。まず乳母は心身ともに健康でなければならないとした後で、ルソーはこう述べている。

Les paysannes mangent moins de viandes et plus de légumes que les femmes de la ville; ce régime végétal paraît plus favorable que contraire à elles et à leurs enfants. [...] *Le lait, bien qu'élaboré dans le corps de l'animal est une substance végétale.* [...] Le lait des femelles herbivores est plus doux et plus salubre que celui des carnivores. [...] Il se peut que les nourritures végétales donnent un lait plus prompt à s'aigrir; mais je suis fort éloigné de regarder le lait aigri comme une nourriture mal saine, des peuples entiers qui n'en ont point d'autre s'en trouvent fort bien; [...] le maigre loin d'échauffer la nourrice lui fournira du lait en abondance et de la meilleure qualité. Se pourrait-il que, le régime végétal étant reconnu le meilleur pour l'enfant, le régime animal fut le meilleur pour la nourrice? Il y a de la contradiction à cela²⁵⁾. (強調筆者)

注目すべきは、ルソーにとって乳はあくまで「植物性の」食べ物である、ということだ。最後の部分にはルソー自身の注が付いていて、「ピタゴラス式食事療法 (régime pythagoricien)」についての詳しいことは、コッキ (1695—1758) とピアンキ (1693—1775) を参照のこと、とされている。自ら「重要な問題」と認識している通り、ルソーは科学的根拠に基づいた菜食療法に高い

関心を抱いていたようだ。『エミール』執筆（1758—60）当時の書簡によると、ルソーは、1759年5月5日ごろ、A・C・コッキの *Del vitto pitagorico per uso della medicina*（1743）を入手している^{26）}。この本には、「草食動物の乳は動物のからだの中で作られるものではあるけれども、まだ完全には植物としての特性を失ってはいない」といったくだりがあり、ルソーはこのあたりから知識を得ていたようである^{27）}。この植物性の食べ物としての乳、ないし乳製品が、重要な意味を持つてくる興味深い例が、『新エロイズ』の中に見出せる。次章では、まずこの点から検討してみよう。

3. 食べ物と人間の性格

エミールは、彼の受けた「教育の自然の結果」、「おいしい果物、おいしい野菜、おいしいクリーム^{28）}」を好むようになるのだが、同じような植物性の食べ物、わけても、乳製品と菓子に対する嗜好は、『新エロイズ』に登場する女性たちにも見られる。この小説的虚構の中で、食べ物——特に植物性の——がどのような役割を演じているかを見てみることにしよう。『新エロイズ』第四部の、クラランの家政について報告する第十の手紙の中で、日曜ごとに開かれる女たちの集まりが描かれるが、それはほとんど食べ物の放しに終始しているといつてよい。

La collation vient, composée de quelques laitages, de gauffres, d'échaudés, de merveilles, ou d'autres mets du goût des enfants et des femmes^{29）}.

ここに列挙された一群の乳製品と菓子が、すでにこの女達だけの集まりの雰囲気暗示しているようにも見える。ジュリを精神的な支柱とした女性原理が支配するこの「間食（collation）」では、すべてのワインと男性が排除されているのだが、例外的に参加を許されたサン＝ブルーの口から、これらの食べ物に対する惜しめない賛辞が送られる。

Je fis un goûter délicieux. Est-il quelques mets au monde comparables aux laitages de ce pays? Pensez ce que doivent être ceux d'une laiterie où Julie préside, et mangés à côté d'elle. La Fanchon me servit des grus, de la céracée, des gauffres, des écrelets. Tout disparaissait à l'instant. Julie riait de mon appétit^{30）}.

そしてその直後、この間食の集まりの「古代的な簡素さ」について言及がなされる。

Il régnait dans cette petite assemblée un certain air d'antique simplicité qui me touchait le cœur; je voyais sur tous les visages la même gaieté et plus de franchise, peut-être, que s'il s'y fut trouvé des hommes. Fondée sur la confiance et l'attachement, la familiarité qui régnait entre les servantes et la maîtresse ne faisait qu'affermir le respect et l'autorité, et les services rendus et reçus ne semblaient être que des témoignages d'amitié réciproque. Il n'y avait pas jusqu'au choix du régal qui ne contribuât à le rendre intéressant. *Le laitage et le sucre sont un des goûts naturels du sexe et comme le symbole de l'innocence et de la douceur qui font son plus aimable ornement*³¹⁾. (強調筆者)

この「一種の古代的な簡素さ」をもたらす原因——それも、軽視できない原因——のひとつは、「無邪気と優しさのシンボル」たる「乳製品と砂糖」であろう。古代的な簡素さとは、ルソーが尊ぶ美点の一つであるが、ここではひとえに、贅沢な料理や「強烈な味、アルコール性の飲み物」を排した食べ物に由来する。ここではもちろん、表向きには、ジュリの徳の表れのひとつとして、和気あいあいとした間食の有様が描かれているのであるが、実のところは、使用人たちを規則や力づくによってではなしに円滑に管理し、働かせるための統率術が述べられているのである。少し前を読むと、〈Pour prévenir entre les deux sexes une familiarité dangereuse, on ne les gêne point ici par des lois positives qu'ils seraient tentés d'enfreindre en secret. [...] Tel qui taxerait en cela de caprice les volontés d'un maître, se soumet sans répugnance à une manière de vivre qu'on ne lui prescrit pas formellement, mais qu'il juge lui-même être la meilleure et la plus naturelle³²⁾〉とあり、この間食は、女性を男性に近づけないための、ひとつの手段であることが分かる。また少し後では、〈Ce n'est rien de contenir les femmes si l'on ne contient aussi les hommes. [...] Tout l'art du maître est de cacher cette gêne sous le voile du plaisir ou de l'intérêt, en sorte qu'ils pensent vouloir tout ce qu'on les oblige de faire³³⁾〉と明言されている。この次には、男たちを様々な競技に参加させることによって服従させるノウ・ハウが語られることになるだろう。「エミール」においても〈le moyen le plus convenable pour gouverner les enfants est de les mener par leur bouche³⁴⁾〉ということが説かれるが、クラランの間食の集まりに隠された仕掛けはずっと巧妙である。たとえ「主人と召使の間にある親しさが、信頼と愛情の基づく」ものであっても、見かけの無邪気さと優しさは、無意識の服従の結果なのだから。この集會に、肉や強い酒は禁物だろう。肉食は人を野蛮にしまう。先の引用に続く部分では次のように述べられている。

Les hommes, au contraire, recherchent en général les saveurs fortes et les liqueurs spiritueuses; aliments plus convenables à la vie active et laborieuse que la nature leur

demande; et quand ces divers goûts viennent à s'altérer et se confondre, c'est une marque presque infaillible du mélange désordonné des sexes. En effet j'ai remarqué qu'en France, où les femmes vivent sans cesse avec les hommes, elles ont tout à fait perdu le goût du laitage, les hommes beaucoup celui du vin, et qu'en Angleterre où les deux sexes sont moins confondus, leur goût propre s'est mieux conservé, *En général, je pense qu'on pourrait souvent trouver quelque indice du caractère des gens dans le choix des aliments qu'ils préfèrent.* Les italiens qui vivent beaucoup d'herbages sont efféminés et mous. Vous [Edouard] autres anglais, grands mangeurs de viande, avez dans vos inflexibles vertus quelque chose de dur et qui tient de la barbarie. Le suisse, naturellement froid, paisible et simple mais violent et emporté dans la colère, aime à la fois l'un et l'autre aliment, et boit du laitage et du vin. Le français, souple et changeant, vit de tous les mets et se plie à tous les caractères³⁵. (強調筆者)

ルソーは食べ物の好みがその人の性格の指標になり得ると考えている。女性が好む乳や砂糖が無邪気と優しさのシンボルであったように、男性の場合、その活動的な生活ゆえに、強い味の食べ物と強い酒を好むとされる。また、肉を大いに食うのはイギリス人であり、それゆえイギリス人は野蛮である。対してイタリア人は菜食であり、女性的な属性を付与されている。この対比の中でも、あくまで菜食にはプラスの価値が、肉食にはマイナスの価値がつきまわっていることが見てとれよう。さて、最後はいよいよジュリの登場である。

Julie elle-même pourrait me servir d'exemple : car quoique sensuelle et gourmande dans ses repas, elle n'aime ni la viande, ni les ragoûts, ni le sel, et n'a jamais goûté de vin pur. D'excellents légumes, les œufs, la crème, les fruits; voilà sa nourriture ordinaire, et sans le poisson qu'elle aime aussi beaucoup, elle serait une véritable pythagoricienne³⁶.

ところが、結局ジュリの性格は、ほのめかされるにとどまっている。「正真正銘のピタゴラス派」とあるところのジュリは、はたしてどんな性格をしているのだろうか。ここで、すでに見た菜食主義と性善説の関連性について思い起こせば、ジュリの性格は一目瞭然であろう。無邪気で優しいといった女性としての美点はもとより、冷静かつ温和で素朴な性質を兼ね備え、要するに人間の長所ばかりを集めた善良な女性としてのジュリのイメージが形づくられているのである。

このように、人の性格や気質が食べ物の好みにも反映する。もしくは食べ物が人間の性格にも影響を及ぼし得るという考え方は、18世紀において、かなり広く信じられていたようである。少し時代を下ったところで、ブリア＝サヴァランの有名な文句「どんなものを食べているか言って

みたまえ、君がどんな人かを言い当ててみせよう³⁷⁾」は、単に肉とか野菜といった物質レベルでの食べ物のみならず、社会的階層によって異なる調理方法や用いられる素材の質等、文化としての料理まで含めてのことであろう。ルソーの場合、外界の刺激が人間精神に影響を与える一つのケースとして、物質レベルでの食べ物の問題を扱っている。『告白』の中でルソーはこう述べている。

En sondant en moi-même et en recherchant dans les autres à quoi tenaient ces diverses manières d'être je trouvais qu'elles dépendaient en grande partie de l'impression antérieure des objets extérieures, et que modifiés continuellement par nos sens et par nos organes, nous portions sans nous en appercevoir, dans nos idées, dans nos sentiments, dans nos actions mêmes l'effet de ces modifications. [...] Les climats, les saisons, les sons, les couleurs l'obscurité, la lumière, les éléments, *les aliments*, le bruit, le silence, le mouvement, le repos, tout agit sur notre machine et sur notre âme par conséquent³⁸⁾. (強調筆者)

こうした観察をもとに、ルソーは『感覚的道德、あるいは賢者の唯物論』なる書物をものそうと試みるのだが、残念ながら実現されることはなかった。しかし、言わんとするところは、今挙げた引用部分のみで十分に明白だろう。ここに示された自己認識、あるいは人間認識の方法は、コンディヤックの感覚論にも通じるものである³⁹⁾。感覚的人間 (*homme de la sensation*) としてルソーは、外界の刺激や、それによって引き起こされる印象に身を委ねる。食べ物もまたそうした刺激のひとつであるが、魂にも働きかけるものであるがゆえに、その選択はおろそかにはできないのだ。次の『エミール』からの引用は、肉食が人間の性格に与える影響と、その裏返しによる菜食の評価が端的に表れた例として興味深い。

Il importe surtout de ne pas dénaturer ce goût primitif et de ne point rendre les enfants carnaciers : si ce n'est pour leur santé c'est pour leur caractère; car de quelque manière qu'on explique l'expérience, il est certain que les grands mangeurs de viande sont en général cruels et féroces plus que les autres hommes; cette observation est de tous les lieux et de tous les temps : la barbarie anglaise est connue; les Gaures, au contraire, sont les plus doux des hommes. Tous les sauvages sont cruels, et leurs mœurs ne les portent point à l'être, cette cruauté vient de leurs aliments. Ils vont à la guerre comme à la chasse et traitent les hommes comme les ours. En Angleterre même les bouchers ne sont pas reçus en témoignage, non plus que les chirurgiens; les grands scélérats s'endurcissent au meurtre en buvant du sang. Homère fait des Cyclopes mangeurs de

chair des hommes affreux, et des Lotophages un peuple si aimable qu'aussitôt qu'on avait essayer de leur commerce on oubliait jusqu'à son pays pour vivre avec eux⁴⁰⁾. (強調筆者)

「ゲートル人 (Gaures)」とはゾロアスター教徒の一派で肉を食べない。「野蛮人の食べ物」とは、文脈から言っても、肉を中心とした食べ物であろう。このような議論が、先に挙げたピュフォンにおける、馬の食べ物とその性質に関する議論と共通していることは、たやすく見て取れるであろう。乳製品や菓子が女性にとって「無邪気と優しさのシンボル」であるならば、菜食は人間にとって、平和と温厚さのシンボルであると言える。ルソーにとって植物は、食べ物という形をとっても、やはり自然との調和 (《ne pas dénaturer》) に根差した平和と充足の象徴であり続けるのである。

おわりに

西洋において肉食を支える思想は、人間と動物との間にはっきりと一線を画し、人間をあらゆるものの上位におくという、キリスト教との結び付きも強い人間中心主義にある⁴¹⁾。エリザベス朝の時代であれば、この人間中心主義を楯に人間の生命維持や健康の保持増強に役立つ一切を殺害してもよい自由権を自然は人間に与えているのである、と居直ることもたやすかったかもしれない⁴²⁾。しかし、18世紀においてこのような議論が公然とは通用しなくなった背景には、K・トマスの言うように、都市では家畜に接触しなくなった事から、逆に屠殺の残酷さを容認できないとする感情的態度が養われた⁴³⁾、という要素もひとつには考えられよう。また、K・エーダーはより大きな視点から、自然に対する、実用的な目的を持った「道具的な関わり方」に対して、「道徳的な関わり方」が広まってきた、すなわち、人間に妥当すべき道徳が自然に対しても拡張されてきた、と捉える。動物の畜産・屠殺といった道具的な関わり方が、愛玩動物に対して代表的に見られるような道徳的・美的感情の侵害として厭わしく感じられるようになった興味深い実例が、肉食に伴う両義的な感情である、というのである⁴⁴⁾。

確かに人間中心主義は、当時流行の博物学の方面からも、徐々に切り崩されてきた。存在の連鎖を押し進めていくことは、結果として、人間を神のほうへ引き上げるよりも、動物のほうへと引き下げることに役立ったし、ホップズは人間を動物と同一視することで、ルソーは動物を人間と同一視——あらゆる動物との平和的共存、オランウータンと未開人——することで、それぞれ、人間中心主義の崩壊に一役買ったともいえる。また、ルソーにおいて、例えば植物学の趣味は、知的・理論的好奇心に基づく科学的認識の対象として自然をとらえる、道具的な対自然関係であると同時に、花を美しいものとして観賞したり、野山を歩き回って植物採集をすること自体に楽

しみを見出したりする、非道具的対自然関係でもある。このような二重性、アンビヴァレントな自然意識が、必ずしも菜食実践者ではないが、著作の中では菜食擁護論を展開する、といったところにも表れていると言って良いだろう。

小論では、主として『人間不平等起源論』、『エミール』、『新エロイズ』に見られる菜食についての議論を取り上げて、その背後にある思想がいかなるものであるか、また、それを支える自然意識がどのようなものであるか、ということについて検討してきたわけであるが、もちろん、これがルソーの食に対する考え方のすべてではない。冒頭で見たルソー自身の食生活から、食に対するルソーのもう一つの基本姿勢が浮かび上がってくるのだが、すでに見たように、それは例えば単純な料理の勧めという形をとり、『エミール』において再現される。菜食と単純な料理、この二つの主張に共通するのは、自然にしたがえという理念であって、菜食は、肉食という文明そのものに対立する——文明に毒されていない——という意味で自然であり、単純な料理は人為、人工に対立するという意味で自然である。食は文化であると同時に、自然の欲求にもとづく基本的な生の営みでもある。ルソーの場合、自然人、子供、感覚的道德といった形で、人間の自然を深く掘り下げることによって、理想の食のあり方を提起しようとしたと言えるだろう。

註

- 1) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 《Bibliothèque de la pléiade》, 1959 sq. (以下 O.C. と略す), I, p. 808.
- 2) O.C.III, p. 135.
- 3) オウィディウス『変身物語 (上)』岩波文庫, 1981年, p. 15。
- 4) Pufendorf, *Le droit de la nature et des gens*, l. II, ch. ii, 2 (O.C. III, pp. 1306-7 参照)。
- 5) O.C.III, p. 135.
- 6) O.C.III, p. 198.
- 7) O.C.III, p. 135.
- 8) O.C.III, p. 199.
- 9) 同じ頃に書かれた『言語起源論』(1754年)においても、《L'estomac ni les intestins de l'homme ne sont pas faits pour digérer la chair crue; en général son goût ne la supporte pas》(Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, Paris, Gallimard, collection 《folio》 1990, p. 102)という記述が見られる。
- 10) O.C.III, p. 199.
- 11) O.C.III, pp. 201-2.
- 12) O.C.III, p. 199.
- 13) Buffon, *Histoire naturelle* (vol. 4), Paris, 1753, pp. 176-7.
- 14) *op. cit.*, p. 440.
- 15) K・トマス『人間と自然界』法政大学出版局, 1989年, p. 436.

- 16) O.C.IV, pp. 412-4.
 - 17) 生の肉や血に対してルソーが生理的な激しい嫌悪感を抱いていたことは、『孤独な散歩者の夢想』の中の一説からもうかがうことができ、彼がなぜ植物学の研究を選んだかということに関して、動物学が決して自分に向かない理由を解剖の残酷さの中に見ている (O.C.I, p. 1068 参照)。
 - 18) *Le Grand Robert de la langue française, dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française* (1978-8)は、1873 年の Théodore Hahn, *Traité de la cuisine végétarienne d'outre-Rhin* を「végétarien」(adj.)の最初の用例とし、*Grand Larousse de la langue française* (1971-8)もこれになっている。*Oxford English Dictionary* (second edition, 1989)によると、1847 年の Vegetarian Society の創立に先立つ 1839 年の使用例が《Vegetarian》の初出として挙げられている。
 - 19) 「百科全書」の《végétal》の項目には、《végétal, régime, (Médec. Diète)》と小見出しを付けた上で、《Eloge de la nourriture tirée des végétaux》という記述が見られる。同じく《pythagorisme》の項目には《ils [pythagoriciens] se rassemblaient autour de tables servies de pain, de fruits, de miel, et d'eau[...]. Un vrai pythagoriciens, interdisait l'usage des viandes, des poissons, des œufs, des fèves et de quelques autres légumes.》とある。
 - 20) K・トマス, 前掲書, pp. 436-7。
 - 21) J・ロック『教育に関する考察』岩波文庫, 1967年, pp. 26-30。
 - 22) O.C.IV, pp. 407-8.
 - 23) O.C.IV, p. 411.
 - 24) *ibid.*
 - 25) O.C.IV, pp. 274-276.
 - 26) *Correspondance Complète de J.-J. Rousseau*, annotée par R.A.Leigh, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1965, tome VI, p. 88.
 - 27) O.C.IV, p. 275, 注 1 参照。
 - 28) O.C.IV, p. 465.
 - 29) O.C.II, p. 451. ただし《merveille》は土地の菓子の類。
 - 30) O.C.II, p. 452. ただし《céracée》は「サレーヴ山地でつくられるすばらしい乳製品」(ルソー自注), 《gru》はクリームを混ぜた凝乳, 《écrelet》は一種の香料入りパン菓子。
 - 31) *ibid.*
 - 32) O.C.II, pp. 449-50.
 - 33) O.C.II, p. 453.
 - 34) O.C.IV, p. 409.
 - 35) O.C.II, pp. 452-3.
 - 36) O.C.II, p. 453.
 - 37) プリヤ＝サヴァラン, 『美味礼讃 (上)』岩波文庫, 1967年, p. 23。
 - 38) O.C.I, p. 409.
 - 39) 《c'est des sensations qui la[âme] modifient, qu'elle tire toutes ses connaissances et toutes ses facultés.》(Condillac, *Traité des sensations* Paris, Fayard, 1984, p. 285)
 - 40) O.C.IV, p. 411-2.
 - 41) 鯖田豊之『肉食の思想』中公新書, 1966年, p. 58。
 - 42) K・トマス, 前掲書, p. 449.
 - 43) 同, pp. 454-5。
 - 44) K・エーダー『自然と社会化』法政大学出版局, 1992年, pp. 200-1, 206。
- 【付記】 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。